

第 19 回湘南オープンウォータースイミング 2022 大会
支援参加報告書

コロナ禍により 3 年ぶりの開催となった表記行事について、大会支援として連盟指導員が安全管理スタッフとして参加。事故などなく無事に終了したので以下の通り概要を報告します

期 日	2022 年 9 月 10 日（土） ※今年は 1 日のみ開催
場 所	神奈川県逗子市 逗子海岸、及び逗子湾水面
主催者	湘南オープンウォータースイミング実行委員会、NPO 湘南マリンオーガニゼーション
距離等	フィンスイム 2,500m スイム 2,500m 中学生～80 歳代 障害者 各区分あり
泳者数	1025 名（エントリー後、参加費まで払込み済みの人数） 当日スタート総数：907 名 完泳者総数：882 名 途中リタイヤ：25 名
天候等	晴れ 北東よりの風 波ほぼ無し うねりなし 流れあり 気温 31 度／水温 26 度
指導員	倉田秀一 小林恵子 中谷林太郎 中村雅人 以上 4 名

■大会概要（2019 大会後、コロナにより 2020・2021 の大会は延期となり、今回通産 19 回を開催）
周回コースでなく 10km という長距離（逗子海岸～江の島地区の片瀬東浜まで）をワンウェイで実施する大会は例がなく、距離・参加人数、そしてレスキュー体制・スタッフ・ボランティア等も含め国内最大の規模（2.5km のモノフィン、ビーフィンも開催）となっている。また 10km は長すぎるという方向けの 2.5km のスイム、800m のチャレンジスイムも並行開催している（以前は 5km 競技もあり）
今回は 3 年ぶりとなり選手も運営側もブランクがある為、10km 開催は見合わせ 2.5km のみとした。
密集を回避する為、例年よりも区分けを増やし順次ウェーブスタート（12 ウェーブ）で行い、逗子湾外になる折返しポイントから戻る方式。また従来は 2 日間で開催していたが、今回は土曜 1 日のみ開催。
一般ボランティアも担当区分毎に募集し、前日の海浜清掃なども含め、毎年非常に多くの方にお手伝い頂いている。スポーツ振興基金(TOTO)助成事業。当日のスターターは来賓の逗子市長。

■支援業務内容

9 月 10 日朝 6 時 30 分に逗子海岸集合。レスキューチューブ等も用いて泳者のスタート時、及びゴール時の選手誘導とリタイヤ者の確保・対応等に、PWC・ライフセーバーなどと密接に連携、従事した。
（通常は 10km 開催日は鎌倉市腰越漁港、2.5km 等実施時は江の島・湘南港へ集合し、専用船で移動）
尚今回のみ中村は沖合の定点監視船（漁船）へ配置となり、海上統括として従事した

■レスキュー体制（当日朝 6 時からの安全委員会で現場を確認し、開催可否を決定）

IRB（安全委員長）1 艇、レスキュースレッド付き PWC 9 艇、水上ライフセーバー 46 名、警戒監視ゴムボート 4 隻、救急救命士艇 1 隻、海上統括船 1 隻、救護所にドクター 1 名、看護師、陸上 LS など
（救急救命士 2 名のうち 1 名がコロナ濃厚接触者で当日欠員となり、救急救命士艇を 2⇒1 艇に減数調整）

■大会主催等について

日本財団と笹川スポーツ財団が「新しいスポーツの育成と地域の振興」を目的とし「オープン・ウォーター・スイミング」を種目として選択。国内マリンスポーツ発祥の地域である湘南海岸が選ばれた。
当初は笹川スポーツ財団に事務局を置いて実施されたが、5 年連続安定して開催したことにより「新しいスポーツとしての基礎育成は十分に成された」として財団に置いた運営事務局は終了した。
その後大会に関わった地域のメンバーなどを笹川スポーツ財団がバックアップし、大会運営母体として「NPO 湘南マリンオーガニゼーション」を設立。各マリンスポーツの団体や行政（外郭組織）などが実行委員会を結成し運営を行っている（JUDF は初回、及び NPO 設立当初より実行委員会構成団体）
本行事は日本水泳連盟のサーキットレース認定大会で、男女上位 3 名が日本選手権への出場枠を獲得。
またオリンピックに際しては、選手選考にも影響する主要な大会となっている

報告者 中村雅人（大会実行委員／安全委員）

大会当日の様子

(沖合の統括船からで、浜に近いダイバー活動エリアの写真が手元にありません)



強風の中、ターンマーカー付近でもデットヒートの女子選手



色分けされた各ウェーブの選手と誘導する LS





終盤、障害者クラスへの監視、LIFE SAVER 併走



リタイヤ者レスキュー LS から PWC へリレーピックアップ



浜側からほぼこのエリアまで、ダイバーによるサポート範囲
 今回、新しい試みとしてスイマーに付けたタグからビーコンを発し、緊急時に本部でアラートが出る
 システムの実証実験も行われ、水面に多数の専用アンテナ・ブイも設置された



IRB（Inflatable Rescue Boat）で指示を出す安全委員長



救急救命士艇（青い旗がスターオブライフ：救命のシンボルマーク）



審判長、セフティーオフィサー（LS）ボート

尚本大会に於いては、海上保安部からの指示により、レスキュー部門の船上従事者は、特例で救命具の上から識別として大会Tシャツ着用を求められた（夏場に横行している悪質・危険なPWC対策として）